

# Web 交流会「歴史を知ることのおもしろさと可能性」

## 開催内容

1. 日時：令和 6 年 1 月 9 日（火） 16：00～17：30
2. 場所：オンライン（Zoom）
3. 登壇者：

役割	所属	役職	氏名 (敬称略)
パネリスト	函館湾岸価値創造 プロジェクトチーム	会長	布村 重樹
パネリスト	全国通訳案内士	-	大山 幸彦
パネリスト	NPO 法人ほっかいどう学 推進フォーラム	特別研究員	宮川 愛由
パネリスト	NPO 法人利尻ふる里・ 島づくりセンター	理事代表	小坂 実
ファシリテーター	公益財団法人はまなす財団	主任	大関 太一

#### 4. 交流会の様子

##### ア 函館湾岸価値創造プロジェクトチーム 会長 布村 重樹 氏

- 函館は、1859 年の日米修好通商条約で開港しました。函館の特異性は、日本初の開港都市として最新技術が流入している点、良質なコンクリートの構造物を数多く有している点などです。函館は、コンクリートの草創期のドラマを見ることができます。また、1935 年時点では、札幌よりも人口が多く、大変栄えていました。
- 函館湾岸価値創造プロジェクトは、一見価値を感じられないものでも地域の特異性が差別化になるのでは、という仮説のもと、函館湾岸地域の埋もれた地域資源に価値を見出し、創造する仕組みを構築しています。具体的には、コンクリート遺産の情報のデータベース化、冊子化、体験観光メニューの開発などを行っています。
- 作成したデータベースを活用し、パネル展の開催や、旅行会社と連携したバスツアー、ガイドツアー、フォトコンテストなどを実施しました。また、地域の飲食店と連携して、コンクリートラスクという固くておいしいラスクを開発し、販売しています。コンクリートラスクは、専門家が実際の強度を測



定するなど、細部にもこだわっています。

- 小坂さんのお話とも関連して、函館は真昆布の産地ですが、真昆布は地名がついていないため、あまり産地としての認知度が低い状況です。昆布に脚光を浴びせる活動をしたと考え、観光庁の事業で、外国人旅行客向けに、献上昆布を体験するツアーを実施し、おぼろ昆布削り体験や味くらべなどを実施しました。昆布つながりで、うまく連携していきたいです。

## イ 全国通訳案内士 大山 幸彦 氏

- 本日は、外国人観光客向けのガイドとして、歴史をおもしろおかしく知ってもらうためのテクニックをお伝えします。歴史を知るということは、自分を再発見することだと思います。自分のことに関わりがないと、人は関心を抱けないのではないかと考えています。
- 興味の持ち方は、人それぞれです。北海道開拓 150 年の歴史を一からお話しても、興味を持てるポイントは限られてしまいます。歴史について話す際は、今ある時点から遡って相手の興味のあるポイントや、ルーツを探りながらお話すると、興味を持ってもらえます。
- ガイドは、人のプライバシーに触れることはできませんが、自分のプライバシーは自由にお話することができます。自分の情報を話しながら、相手との共通点を探し、お客様の琴線に触れるポイントを見つけます。そのためには、自分の引き出しを多く持つ必要があります。
- 北海道は、そこまで歴史は長くありません。しかし、北海道の歴史は、短いかからこそ、自分史と重なる部分が多いです。その点では、非常に稀有なエリアだと思います。北海道の歴史を語る際のおもしろさは、産業遺産も含め、自分事として等身大でお話できる点です。その際は、過去から話すのではなく、現在から遡ることを意識してみてください。
- 宮川さんは、子どもたちに、歴史について興味を持ってもらうための話をされていました。子どもに歴史について興味を持ってもらいたいときは、歴史の遺構についての動画を撮ってもらい、子どもから動画の撮影の方法を教えてもらう、などの切り口でアプローチすると、効果的です。

### ガイドとして歴史を扱う時に気にする事

- 歴史を知るとは、知識や体験を通して自己の領域を広げる事である。誰に言うか、その歴史を知っても、自分のためにならないのであれば、人はあまり興味がない
- 講義中、ツアー中に眠くなるのは「その話は（自分には役に立たないし無駄だし、余計なことを知りたくない）聞きたくない」と言う「自己防衛反応」ではないか」と指摘
- 歴史を知る＝自分を再発見することではないと、人は面白くないのでは。



ウ NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム 特別研究員 宮川 愛由 氏

- NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラムは、北海道を盛り上げる人材を育成する団体です。ほっかいどう学は、子どもから大人まで、北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業を学ぶことで、地域に関する理解と愛着を深めるための活動です。ほっかいどう学の取組は、北海道総合開発計画の第 8 期計画に掲載されています。
- 当団体では、大きく分けて三つの活動を行っています。一つ目は、知識、理解を広めるための活動です。具体的には、北海道の学校の先生向けに、ほっかいどう学新聞の発行や、インフラツアーを実施しています。先生たちから子どもたちへ、北海道の治水や除雪、インフラなどの仕組みを伝えることを狙いとしています。インフラツアーでは、本日参加されている大山さんにもガイドをご依頼しています。
- 二つ目は、人材育成の活動で、出前講座の実施や、教材開発などを行っています。具体的には、北海道開発局、学校教員と連携しながら「みち学習」として北海道のインフラを学ぶ授業づくりをお手伝いしています。教材開発では、動画やデジタル端末で使える副読本などを作成しています。
- 三つ目は、連携、交流の活動です。シンポジウムや、セミナーなどを開催しています。シンポジウムは、地域づくり活動で活躍している方をお招きし、札幌で年 1 回開催しています。セミナーは、道内各地で年 2 回、開催しています。
- 北海道の豊かな自然、食、観光資源は、当たり前ものではなく、先人の方たちが作り、維持されていたから成り立っているものです。私たちは、ほっかいどう学の活動を通して、北海道の未来を担う子供たちの、地域への興味、愛着を醸成していきます。
- これまで、インフラツアーを学校の先生向けに実施していました。子ども向けに直接インフラを見てもらいたいとも考えています。大山さんに子ども向けのガイドの仕方を聞いてみたいと思います。



エ NPO 法人利尻ふる里・島づくりセンター 理事代表 小坂 実 氏

- NPO 法人利尻ふる里・島づくりセンターは、20 年程、未利用資源を活かした地域づくり活動を行っています。昆布やワカメは、市場で販売できますが、雑海藻は、漁に出る際の障害や、悪臭の原因になっていました。当団体では、その利用価値のない雑海藻をアートに活用する活動を行っています。
- 具体的には、島外の関係者とも連携し、海藻押し葉のまちづくり実行委員会

を立ち上げ、全国コンクールや、島外での展示会などを実施しています。全国コンクールは、これまで3回実施し、700点の作品を展示しました。

- 活動拠点は、海産問屋だった築130年の空き家をリノベーションした場所です。ここは、「島の駅」として、海藻押し葉のギャラリーや、海藻押し葉のしおりやキーホルダーづくりなどの体験工房、島民と観光客の交流カフェとして活用しています。コロナ禍前は、外国人も含め、8,000人ほど観光客が訪れています。
- その他には、子どもたちへの海藻押し葉の体験学習会、クルーズ船が寄港した際のおぼろ昆布の実演販売、昆布酢などの商品開発を行っています。今後は、町内の空き店舗を活用し、昆布に特化した、学べる、体験できる施設を作っていきたいと思っています。
- 大山さんが、おぼろ昆布のうどんを食べた画像をチャットに投稿しています。おぼろ昆布は、とろろ昆布と違い、職人がカンナのような道具で、手で削るものです。利尻町のふるさと納税の返礼品にもなっているので、ぜひ見てみてください。

